庭園の背後思想と構成に関する研究 (Ⅱ)

——夢窓国師と永保寺庭園の構成について (その2)

澤 田 天 瑞*

A Study on the Japanese Gardens Viewed from the Teachings of the Rinzaï Zen Buddhism (Ⅱ)

——Case Study on the Eihōji Garden, Gifu (No. 2) ——

by Tenzui SAWADA*

1. 序 論

本研究の目的は、岐阜県多治見市にある虎溪山永保寺庭園の作庭構成とその表現内容を夢窓国師の「夢中問答」に基いて、思想的に解明しようとするものである。永保寺は臨済宗南禅寺派の禅寺で、正和2年(1313)に夢窓国師が開創した古谿庵を前身とし、のちに仏徳禅師の門下に移譲して虎溪山永保寺と改名されたものである。庭園は観音堂を中心に、自然の岩壁を巧みに利用して瀑泉となり池泉に注いでいる。池泉は3個所にあつて、北部の大池泉には中央に大きく廊橋を架け、3個所に中島を配した面積約9,240㎡の廻遊式築山林泉庭園である。

本庭園は、古谿庵開祖夢窓国師が、悟道後の「長養の工夫」のため、庭園の主題を「臨済録」から「臨済禅の根本思想」、構想は「廬山記」から「坐禅三昧による己事の究明」・構成は「永嘉証道歌」に基いて「根本内証の境界」を表現した、廻遊式築山林泉の臨済宗禅林庭園であると考察した。

前論において、本庭園の主題である「臨済禅の基本思想」を「臨済録、序」の「院臨古渡、運濟往来。把定要津、壁立万仞。奪人奪境、陶铸仙陀。三要三玄、鈴鎚衲子。常在家舍、不離途中。無位真人、面門出入。両堂齐喝、賓主歴然。照用同時、本無前後。菱花对像、虚谷伝声。妙心無力、不留朕迹。」(大正新修大藏経第47巻、P496)と、「臨済録、臨済慧照禅塔記」(大正新修大藏経第47巻、P506)の故事に基いて考察した。構想である「坐禅三昧による己事の究明」については、「廬山記」(大正新修大藏経第51巻、P1025)に紹介された廬山の地勢と由来に基いて、本庭園の地割に配当し、その関係を照合して考察した。

本論においては、本庭園の構成である「根本内証の境界」を「永嘉証道歌」(大正新修大藏経第48巻P395)に基いて考察することとした。

2. 庭園の構成

本庭園の構成は、「永嘉証道歌」に基いて「根本内証の境界」を表現している。

「永嘉証道歌、①君不見。絶学無為閑道人。不除妄想不求真。無明実性即仏性。幻化空身即法身。法身覺了無一物。本源自性天真仏。五陰浮雲空去来。三毒水泡虚出没。証実相無人法。刹那滅却卻阿鼻業。若将妄語証衆生。自招拔舌塵沙劫。頓覺了如来禅。六度万行体中円。夢裡明明有六趣。覺後空空無大千。無罪福無損益。寂滅性中莫問覺。比来塵鏡未曾磨。今日分明須培折。②誰無念誰無生。若実無半無不生。喚取機関木人間。求仏施功早晚成。③放四大莫把捉。寂滅性中隨飲啄。諸行無常一切空。即是如来大円覺。決定説表真僧。有人不肯任情徴。直截根源仏所印。摘葉尋枝我不能。摩尼珠人不識。如来藏裡親収得。六般神用空不空。一顆円光色非色。④浄五眼得五力。唯証乃知難可測。鏡裡看形見不難。水中捉月拈得。⑤常独行常独歩。達者同遊涅槃路。調古神清風自高。貌領骨剛人不顧。無価珍用無尽。利物応縁終不悞。三身四智体中円。八解六解心地印。⑥上士一決一切了。中下多聞多不信。但自懷中解垢衣。誰能向外誇精進。従他誘任他非。把火燒天徒自疲。我聞恰如飲甘露。銷融頓入不思議。観悪言是功德。此則成吾善知識。不因訕起怨親。何表無生慈忍力。⑦宗亦通説亦通。定慧円明不滯空。非但我今独達了。恒沙諸仏体皆同。獅子吼無畏説。百獸聞之皆腦裂。香象奔波失卻威。天竜寂聴生欣悦。⑧遊江海涉山川。尋師訪道為参禅。自從認得曹谿路。了知生死不相関。行亦禅坐亦禅。語黙動静体安然。縦遇鋒刀常坦坦。仮鏡毎葉也間間。我師得見然灯仏。多劫曹為忍辱仙。⑨幾回生幾回死。生死悠悠定止。自然頓悟了無生。於諸榮辱何憂喜。⑩入深山住蘭若。岑峯幽邃長於下。優遊静坐野僧家。閑寂安居実瀟灑。覺則了不施功。一切有為法不同。住相布施生天福。猶如仰箭射虚空。勢力尽箭還墜。招得来生不如意。争似無為実相門。⑪一起直入如来地。但得本莫愁本。如浄瑠璃含宝月。我今解此如意珠。自利利他終不歇。江月照杉風吹。永夜清宵何所為。仏性戒珠心地印。霧露雲霞体上衣。降竜鉢解虎錫。両鍬金環鳴歴歴。不是髑髏虚事持。如来宝杖親臨

* 澤田庭園研究所長

跡。⑫不求真不断妄。了知二法空無相。無相無空無不空。即是如來真実。心鏡明鑑無碍。廓然瑩徹周沙界。万象森羅現中。一顆圓光非内外。豁達空探因果。⑬莽莽蕩蕩招殃禍。棄有著空病亦然。還如避溺而投火。捨安心取真理。取捨之心成巧偽。学人不了用修行。真成認賊將為子。損法財滅功德。莫不由斯心意識。是以禪門了却心。頓入無生知見力。⑭大大夫乘慧劍。般若鋒兮金剛焰。非但能摧外道心。早曾落却天魔胆。震法雷擊法鼓。布慈雲兮洒甘露。竜象蹴蹋潤無辺。三乘五性皆醒悟。⑮雪山肥膩更無雜。純出醍醐我常納。一性門通一切性。一法偏含一切法。一月普現一切水。一切水月一月攝。⑯諸仏法身入我性。我性還与如來合。一地具定一切地。非色非人非行業。彈指圓成八万門。刹那滅却三祇劫。一切數句非數句。与吾靈覺何交涉。⑰不可毀不可讚。体若虚空勿涯。不離当处常湛然。⑱覺則知君不可見。不可得中只麼得。⑲點時說說時默。大施門開無壅塞。有人問我解何宗。報道摩訶般若力。或是或非人不識。逆行順行天莫測。吾早曾經多劫修。不是等閑相誑惑。⑳建法幢立宗旨。明明仏刺曹谿是。第一迦葉首伝灯。二十八代西天記。歴江海入此土。菩提達磨為初祖。六代伝衣天下開。後人得道何窮數。㉑真不立妄本空。有無俱遣不空空。二十空門元下着。一性如來体自同。心是根法是塵。兩種猶如鏡上痕。痕垢尽除光始現。心法雙亡性則真。㉒嗟末法惡時世。衆生薄福難調制。去聖遠兮邪見深。魔強法弱多怨害。聞說如來頓教門。恨不滅除令瓦碎。作在心殃在身。不須怨訴更尤人。欲得不招無間業。莫謗如來正法輪。㉓称檀林無雜樹。叢密深沈獅子住。境靜林間独自遊。走獸飛禽皆遠去。獅子兒衆隨後。三歳便能大哮吼。若是野干逐法王。百千妖怪虛閉口。門頓教深人情。有疑不決直須爭。不是山僧逞人我。修行恐墮斷常坑。㉔非不非是不是。差之毫釐失千里是則竜女頓成仏。非則善星生陷墜。㉕吾早年来積學問。亦曾討疏尋經論。分別名相不知休。入海算沙徒自困。卻被如來苦呵責。數他珍宝有何益。從來踏躑躅虛行。多年住作風塵客。㉖種性邪錯知解。不達如來門頓制。二乘精進無道心。外道聰明無智慧。亦愚癡亦小驕。㉗空拳指上生実解。執指為月枉施功。根境法中虛捏怪。不見一法即如來。方得名為觀自在。了則業障本來空。未了還須償宿債。飢逢王膳不能喰。病遇医王争得瘳。在欲行禪知見力。火中生蓮終不壞。勇施犯重悟無生。早時成仏于今在。㉘獅子吼無畏說。深嗟憐憫頑皮。但知犯重障菩提。不見如來開秘訣。有二比丘犯姪殺。波離螢光增罪結。維摩大士頓除疑。猶如赫日銷霜雪。㉙不思議解脱力。妙用恒沙也無極。四事供養敢辭勞。万兩黄金亦銷得。粉骨碎身未足酬。一句了然超百億。法中王最高勝。河沙如來同共証。我今解此如意珠。信受之者皆相応。了了見無一物。亦無人兮亦無仏。大千沙界海中漚。一切賢聖如仏。假使鉄輪頂上旋。定慧門明終不失。㉚日可冷月可熱。衆魔不能壞真說。象駕崢嶸進途。誰

見蟪蛄能拒轍。大象不遊於兔徑。大悟不拘於小節。莫將管見謗蒼蒼。未了吾今為君決。」（大正新修大藏經第47卷）

（通釈）①諸君、是非善惡の分別を超越し、悟道を得て絶対の境地に生きる、すばらしい人生のあることを知っているか。仏道修行の第一歩は先ず妄想を除き真理を求めることにあるが、この境地に達した人は相対的な差別から離れて、除くべき妄想も求めるべき真理もない。無明が即ち仏性であることを自覚するならば、その身そのまま法身であり仏ではないか。諸君は自我という泡沫のような貧賤癡の三毒や、心身を構成する色受想行識の五陰に執着して本性に気がつかずにいる。いま真理を把握し一切の自我を捨てるならば、阿鼻地獄に落ちる罪惡は直ちに消滅してしまう。これは私自身の体験でいうことで嘘や方便でいうのではない。諸君自身が本来清浄心であるという自覚を持つということが、とりもなおさず如來禪を悟ることである。永年に亘り六波羅密を修行して悟りに到る手間もいらず、しかも一切の六波羅密はことごとく如來禪の中に具っている。古今東西のあらゆる出来事を見てもすべて夢の夢であり、妄想の作り出した幻影にすぎないし、一旦夢から醒めて見ればこの世の中は空虚であって何にもないではないか。諸君が恐れている地獄に落ちて罪苦を受けることも、極樂に生れて福業を招くこともないし、不生不滅の涅槃寂滅のところに罪福を求めても、それは無駄ではないか。凡夫は塵の積った鏡のように、妄想の執着でこれを自覚せずにいる。いまや諸君も時節が到来して仏祖正伝の仏法を聞くことができたから、自己本来具っている仏性の光を磨きだすべきである。

②人間は悟たからとて木石のように何にも思考せぬものでもないし、涅槃寂滅の境地に到達したからといって生死を免れるわけでもない。それでは一体何を指して無念といい、誰れを呼んで無生というのか。もし、宇宙全体が無生であるならば、無生という名も立たぬわけである。同様に無念であるならば無念ということも立たぬわけである。しかし、無念の念、無生の生ということは、単なる理窟では判らないし、実際に体験して見なければその妙處を会得することもできない。結局、文字で表せるところではないから、諸君自身に問うて見よ。これを実参工夫といって他に向って求めるものではない。諸君が成仏するために悟を開こうとして学問修行の功を積んでいては、いつまでたっても開悟成仏の時期は到来しない。月の如く無我無心になって一切の妄想分別を離れてしまえば、たちどころに生死即涅槃の事実を手にすることができであろう。

③一切の万物が四大の仮和合であってみれば、和合はいつ解消して離散するかも知れないから、自分の肉体すら当てにできない。一切の万物、諸法は因縁によるもの

であるから、無常、無我、空の道理を知らずに我見を立てるから、そこに苦を生じて現実の矛盾に苦しみ悩むのである。そこで生死という妄想分別を離れてしまえば、生きるときには徹底的に生き死ぬときは徹底的に死ぬ。このように妄想煩惱を滅却させたところに涅槃寂靜の境地がある。現実と理想とを同一視するという実相印が、仏の広大で円満な悟りの心である。この真理は決定して不動のものであり、この真理を人に知らし、機に応じて説くのが仏教であり、伝導教化するのが真実の僧の役目である。私は六祖慧能からこの決定の説を相続しているから、決定の真理、正伝の仏法について疑義のあるものは、遠慮なく質問するがよい。諸君、煩惱を断て菩提を得ようなどということは枝葉末節のことで、仏陀もそのような考へはお許しにならないし、私も容赦はしない。凡夫は仏性という如意珠が心中にあることに気がつかず色に迷い声聞いて執着するから、煩惱の塵や垢に覆い隠されて実体が見えないだけのことである。

④仏性という如意珠を識得するには、信仰力、精神力、正念力、禪定力、智恵力の五力と、真実性を見透せる五眼の法力を見えることが必要である。この五力と五眼は自から体得すべき法力であり、心眼さえ開けばできることであるが、世間の学問や情識の分別では会得することはむずかしい。凡夫は幻影に迷い仮相に執着して取捨僧愛の二見に涉るから、猿が水中の月を捉えようとして水に溺れるような愚を演ずるのである。これは仏性が本来無相であるから、智解分別の心意識では捉えることができないという譬えである。

⑤仏性の如意珠を得た人の境地は、涅槃の大道を思うままに遊戯逍遙されている。これらの人が提唱する仏法は一点の塵垢煩惱もなく格調も高尚であるが、その容貌はやせて贅肉はなく、骨格は剛堅で精神的に凡人と異なるところがあるから、世人は誰れも顧みずこれも常に独り行き独り歩す所以である。私は仏道という無形の財宝を豊富に持っているから、物質的には貧窮して弊衣粗服を着ているが、精神的には裕富である。有形の富は際限があるが、私の持っている無価の富はいくら施しても尽きるという憂いはない。使えば使うほど増加するという宇宙第一の宝である。この無価の宝とは大門鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の四智をはじめ、八解脱、方神通を心中に具有することである。

⑥上智上根の者は、一度び道を聞けば直ちに決定して信解行証するが、中根と下根の者は多くの読書して多くの仏説を聞いても、自己の智見解会に惑わされて悟道することができず、また、悟道に達するに遅いものである。私は六祖慧能より伝えられた正法を布教するに当って、種々の誹謗や迫害に遭遇しようとも、敢然として所信を断行し、大信決定の境地を披歷するものである。私は誹謗を聞いても腹を立てるところか、天の甘露水を飲

むような気持ちができる。誹謗は場合によっては反って精神力を増し、或は忍耐力を養うことになるから、誹謗に対して怨むこともなく、褒められたからといって特に親しくする必要もない。

⑦真に道を体得した境地の人は、戒定慧の三学といって定慧と戒律の二道に通じていなければならない。共に戒律を守るとは仏道修行者として欠くべからざる要件である。これは私だけの独善的な考えでなく、三世の諸仏方も皆定慧と戒律の妙境に達しておられるのを身でも明白である。獅子は百獣の王と称し、一切の動物に対して少しも怖れることをしない。獅子が一度び吼えるとき百獣はその声を聞いて震え上り、象の如き大力の獣も平常の威信を失ってしまう。ただ独り天竜だけは静かに獅子の吼えるのを聞いて、眼を細くし喜びの心を生ずるといふ。中下根で多聞の教家の人達は驚くであろうが、私をはじめ天下達識の上士は六祖大師の正法、本来無一物の禪風を喜んで信解し、これを護持することであろう。

⑧私は明師を求めて各地を遍歴し、遂に曹溪山の六祖大師にお目に掛り、生死即無生、無常即無速の一大事を悟ったが、真の活禪というものは、坐して静かに慮ばかれれば自ずと仏の智恵が生じ、生死の中にあって生死に心が静揺せず、行住坐臥、語黙動靜の間、常に寂然不動の大禪定を離れぬものである。かくの如く仏祖の真禪を得て生死の関門を透脱すれば、鋒刀や毒薬も清風明月となんぞ異ならんやという境地をいうのである。

⑨幸いにも、私達は人間界に生活しているものの、死後の世界は予想もつかない。現世の業力で生死流転を未来永劫に繰り返す、所を定めて止まる訳にはゆかぬものである。これは前生後生を通じての輪廻のことをいったものではなく、喜怒哀楽などはすべてが貧煩惱の迷いの心から生じたものである。迷いの惑によって業をつくり、業によって苦果を招くことを繰り返している。特に生に執着し、死を厭うことが最大の迷いの根本となっている。私は六祖大師に参じて生死即無生の理を会得し、生死実相を自覚してからは、憂悲苦悩の事に心を動かすようなことはなくなった。

⑩身体はたとえ市井の喧噪の中にあっても、生死を透脱して毀誉褒貶、憂悲苦悩に心が動じない人ならば、深山幽谷に静坐すると何んら変らない心境に住むことができる。この身は本来成仏であると悟った人は、多くの方便を用いなくても、すぐさま仏祖正伝の如来禪に到達することができる。その理由は方便の為に立てた法門や妄想分別で作為したもの異なるからである。果報を得るために物を施せば、功德によって福報を受けるであろうが、有為の福であるから限りがある。かかる有為轉變の福報よりも、無為実相の法門によって直ちに仏報広大の功德を収めたほうがいいではないか。仏教八万四千の法門も結局はこの無為実相の門に入らせようとするものであ

る。

⑩仏法の根本を体得すれば、枝葉末節のことはすべて含まれているから、何にも愁うことはない。清浄な瑠璃の水盃に明月の影を宿すように、心が清浄で妄想分別の塵垢がなければ、菩提の覚智はその心の上に光明を放つものであり、仏法を遠くに求める必要はない。池泉の月影は万波の上に宿し、松風は天然の音楽を奏でているではないか。悟りの境地に達した人というのは、仏と寸分も違わぬ仏性の智恵と懷相が自然に具わり、その仏性は考順心となって自らを利益し、慈悲心となって他を利益し、功德によって一切の悪業を制する戒めとなり、戒律を守ることによって人生を明朗化し、この世を清く明るく明珠のように輝かせるものである。このような人の修行力と威徳が勝れているのは、釈尊をはじめとして古聖光徳の足跡を踏んで修行された結果、神通妙用自在の働きができるから、正法が長く伝わるのである。

⑪すでに生死即無生を覚了した即心是仏の人は身心以外に求めるべき真実の法もなければ、断ずべき妄想もあるわけがない。心眼を開いて見れば溪声は仏の説法であり、山の景色は仏の清浄心である。私のように如来の真実相を体得すれば、心はあたかも一点の塵埃も留めず、曇りもない明鏡が映像を少しも味まさないように、色声香味触法の六境を、ありのままに眼耳鼻舌身意の六根に受けて妙用を現わし、秋空に一点の雲もない日本晴れのようにわだかまりのない心となる。そして全宇宙のありとあらゆるものが、悉く自己の心中に包含されて、自己とか世界とかという相対をも離れ、宇宙法界を尽した唯一無二の心境であるから、内外表裏の別もなくなってしまう。

⑫心境を混絶したからといって、誤って空無の見に落ちては一種の禅病となる。この空見に落ちると神も仏もなくなり、すべてを否定して虚無思想になってしまう。これでは世の中の秩序も道徳も成立せず、迷妄を重ねて罪惡を増して身の禍を招く。有に執着することも病いだが、空に住着することも病いである。いずれも大切な法身の生命を害することは同じである。ところが、天下の学者、即ち仏法を学んで修行する者がこの道理を知らずに、妄心を捨てて真理を求めようとしているが、それは大変な誤解であり、そのような態度で修行して、その結果、これが真理であるような悟りを得たとしても、その真理はやはり妄想の影法師に過ぎない。禅の工夫の主眼はこの心意識を了却するところにあることを知って欲しい。生死即涅槃の大安心を得るには、仏の知見の力によらなければならない。

⑬大丈夫たる者は、見聞覚知の外賊のために惑されず、情欲意識の内賊のために迷わされず、仏の知見の慧剣によって生死即無生の実相を照破する。慧剣の威徳は金剛の焰の如く不壊で何者にも破られず、しかも一切の

ものを焼き尽してしまう。故に一度、大丈夫がこの説法をするときは外道や天魔を撃破する力がある。その説法によって一切の衆生が利益を受けて喜ぶ様子は、あたかも旱天に慈雨を得て草木が蘇生するようだ。時に大丈夫は大象が驢馬を蹴ったり踏んだりするように、大丈夫の仏陀が人々を叱り飛ばしても、その声は反って多くの人々を潤益し、蘇生の思いをさせる妙力がある。一切衆生がことごとく仏性であり、本来成仏であるから仏陀の慈悲に照らされて、無種性の人でもことごとく醒悟する。

⑭乳牛が雪山の香りの高い草を食べて、純然たる醍醐を出すように、私は如来円頓の妙法実相の法身を証得して衆生を利益し、しかも常恒に納受して離さない。そして証得した円頓の妙法は吾々の本性であるからである。吾々は自己本来具有する仏性を徹見することによって、真如法性を証得することができる。故に一法を挙げれば一切の万法は尽くその一法中に含蓄されて、少しも漏れるところはない。この我他彼此の対待を絶した円頓無碍の有様を、月と水との譬えて説明しよう。天上の月は一輪であるが、その姿は万水に映り、江河湖海の大より溪澗池沼に影を落して澄濁を選ばず、小は一盆の水、細は草の葉に置く一滴の露といえども漏さず味まさずに、皎々と光をうつしている。その水月の数は実に無量であるが、皆、尽く天上一輪の明月に摂入していると同じように、真如法性無相の法身は唯一であるが、普く一切万法に応じて一塵の中といえども充滿して漏すところなく、また、欠けることなく具わり、一切差別の万法は唯一平等の真如法性に摂入し、無相の法身に包含され尽されている。そこで、吾々がお互いにこの妙理を悟って本具の仏性を覚了し、宇宙の大道に合体すれば、凡愚の身心がそのままに諸仏と円融一如になることができるというものである。

⑮頓教の法門は修行の段階を踏まずに、すべて階級の功德がその身に具わり、階級を超越して諸仏と同じ位いに入る。元来、仏教には八万四千の法門といって、衆生に本来具有の妙心を悟らせるための方便手段がある。枝葉末節の方便手段には拘泥せず、根本問題を解決するのが頓教である禅の特色である。

⑯仏法は宇宙の真理であるから、廃仏毀釈をして寺を焼き、僧尼を還俗させたところで、靈覺の仏法は微動だにしない。これを無量無碍光如来とか、光明徧照十方世界とか讃めたてえてみても、そんな言葉では讃歎し尽せるものではない。何故ならば、靈覺の本位は無限絶対で果てしないからである。法性の真理は虚空の如く充滿している。しかも無相であるから凡人の眼では見ることはできない。あたかも水の湛然として満ちて動かないように、不変不動のものである。故にこの大道を他に求めたら大間違いで、生死の穢土を外にして別に涅槃の浄土があるわけではない。

⑧靈覺の本体は虚空のようなものであるから、私の師匠の六祖慧能も、靈覺の性は一切の相を離れたものであるから取ることができず、一切の法に即するが故に捨てることもできないと明確にいうておられる。では、どのようにして靈覺を悟るかという、得ようと思わず、捨てるようと思わず、すべてが取捨憎愛の念を離れた時に、靈覺は立ちどころに脱体现成してくるというのである。この不可得の妙法は世間の演説や通俗の説教と違って、言端語端の及ばない代物の宣伝をするのであるから、普通の情識では推し測ることはできない。諸君、心眼を開いて見よ、そして、心耳を澄して聞け、到るところに広大な法施の門が開いているのではない。

⑨この仏の大智慧光明を自から会得するのが仏道修行の目的で、教宗でも禪宗でも、また、頓教でも漸教でも、この目的は変らないが、ただ、道を迂回するか直入するかによって、頓漸の区別があるだけで目的は一つである。この摩訶般若の力を得たものは、世間の是非善惡に執れないから、縁に随い、機に応じて少しも滞るということがない。私は実に長い間修行した結果、この摩訶般若の力を得たのであって、徒らに大言壮語して世人を誑かしたり、惑わせたりするものではない。

⑩私が仏弟子として道場を建てて説法するのは、釈尊の法灯である不立文字、教外別伝、直指人心、見性成仏という仏祖の正伝が、摩訶迦葉尊者、阿難尊者と、師匠と弟子とか嫡々相統すること、連綿28代目の達摩大師に至って、ついに六祖慧能に伝えられ、私が相統して諸君に説き聞かせている仏法である。このように正伝の仏法は少しも断絶することなく、その衣鉢を相統するものが数多くなって、私も実に六祖の衣鉢を相統した一人なのである。

⑪諸君、現象差別の諸法は因縁によって生じたものである。真といい、妄というのも、相對上に現われた仮の名前であって、宇宙万象を説明する上の符牒に過ぎないものである。諸君に深遠なる空の義を悟らせようとして、数多くの空を説いてきたが、一切を空し尽した不空の空に体達したときに、われわれ本具の一性、即ち、仏性がそこに現われてくる道理が事実として現成する。われわれ本具の仏性は諸仏と同体同位であり、明鏡のように清淨無垢で一点の痕塵を留めないものであるが、心意識の妄想分別によって靈光がくらまされている。この妄想分別の塵垢を払拭してしまえば、明鏡はたちまちにして本来の靈光を放つものである。このときは心法二つながら泯絶して、尽天尽地たた仏性の靈光のみとなるのである。

⑫末法の惡時世に生れ合わせた人々は、前世より植え来った福分が薄いために、正法を見聞してもこれを信解行証するだけの根機もなく智慧もない。ただ、徒らに目先の慾望に走って、永遠の幸福の基となる種まきをし

ようとしない。釈尊入滅以来、私まで二千年余りを過ぎて正に末法時代となり、仏祖正伝の法も曲解が生じて害毒を社会に流布している。しかも、わが正法の宣布を妨害する魔説が強力である。かかる邪見の徒輩は自からが魔境に墮落していることに気がつかず、頓悟を教える如来の正法を説くのを聞いて、反ってこれを怪しんで正法を壊滅させようと考えている。また、それが不可能なことを恨みにさえ思っている。このように正法を誹謗すれば無間地獄に落ちることを覚悟しなければならない。

⑬曹溪門下の禪林は旃檀林の如く、大乘円頓の妙法を悟了した僧は獅子王の如く、煩惱妄想の喧騒の世界を離れた静寂の境地に、独り自から遊化しているので、外道異端の輩に申すに及ばず、惡魔鬼神といえども、その威に畏れて寄りつくことはできない。正法とはこのようなものである。如来の正法を嫡伝した真の仏弟子は、仏祖と同じく決定無畏の正法輪を転ずる。いま、如来正伝の仏法たる最上禪は円教であり、頓悟の法門であって、西天二十八祖、東地六代を伝承してこの私に到っている。諸君、疑問があるなら遠慮なく質問したらよからう。私がこういふのは我見我慢を逞ましうして、好んで他と論争をしようというのではない。諸君が円頓の法門に対して疑問を抱いて、これを決着せずに放置するならば、いかに苦行修練して見たところが、結局は断見常見の穴に落ち、ついに解脱自由の妙境に到着することが不可能になる。それが氣の毒でたまらないから口やかましくいうのである。

⑭仏道修行には、まづ、妄想分別の先入観を捨てて、我執法執の住着を離れなければ、是も是ならず、非も非ならず、事物の真相を見得することが不可能である。ここが大乘円頓の妙法を聞く上に最も大切なところで、最初の一步を誤ると千里の隔りができてしまう。大乘円頓の教えには男だから成仏するとか、女だからできぬといった差別はつけられていない。しかし、例え男でも邪惡の心を起すと、直ちに無間地獄に落ちてしまうぞ。

⑮私は年少の頃から仏門に身を投じて、経律論の三藏を研究してきたが、その態度はどこまでも学者であり教者であったため、自己に回光返照して大安心を得ることができなかった。釈尊にまのあたり叱責された思いがしたが、今日、その當時を思い返して見ると、從來、これまでの自分が仏教の根本精神を忘れて文字言句の末に走り、多年、他国の風塵堆裏さにさ迷っていたことは実に慚愧に堪えないものがある。幸いにも、曹溪山で六祖慧能に参することができて、自己の本家郷に帰家穩坐して、今日あるを得たものである。

⑯邪惡の性質の者は、経論を読んでも、説法を聞いても、名相言語に拘泥して素直に如来の妙法を領解することができず、自分の邪推な知解分別でこれを錯会し、ついに円頓の法則にも違背する。だから、いつまでも生死

の苦境をさまよい、善星比丘の極き極端な者まで出て来る。邪惡な錯解者というものは、声聞と縁覺の二乗を見惑思惑の煩惱と断じ、そして克已して精神努力はするが、自利のみを事として他利の道心が少しもない。

②拳を開けば空で何もない。ところが無智というものは情けないもので、その空拳の法門に何にか有難い仏様でもおられるように、それに住着してしまう。子供に月を教えて見ると、月を指す母親の指を見て月を見ないように、説法の言説や経文の文字に拘泥し、真如の月を標示するための指に外ならないことを認識しようとしなない。発心して修行の功徳を積んでも、目的が間違っているは何んの役にも立たないばかりか、主観の根、客観の境と二見相對の法を立てて、如来真実の相を自から見えぬようにしてしまうのである。

③一切万法は無自性不可得であるという真実相を了悟すれば、いかなる惡業罪障も本来空である道理が信解されて、大安心を得るものであるが、その了悟ができないうちは万境に心が転じて迷いに迷いを重ね、惡業に惡業を重ねて宿積となっていく。その償いに追われて間断なく苦しめられている。諸君、宇宙の大道は随所に現われ、正法は古今に流伝していても、これを信じ、これを修行しなければ、生死の苦惱を解脱して涅槃の妙薬を得ることはできない。真の大丈夫ならば、如何なる欲火に相遇しようとも焼失することはない。例えば、泥中から生じて咲く蓮華のようである。昔、勇施という出家は二重禁戒を犯して深く慚愧したとき、仏の教えに深く思惟して忽ち無生忍を悟って成仏し、現に宝月如来となって西方常光国におわす。仏の知見を開くことが如何に大きな功徳であるかを、諸君は知るべきである。

④いま、私の説く教えはとりもなおさず釈尊の説法であり、祖師の訓誨であり、大乘円頓の如来禅であるが、この説を信解する者の少ないことは歎かわしい。諸君はただ、重禁戒を犯す時は仏道修行の障碍となることを知っているが、如来が罪障不可得、畢竟、無自性であるという妙理の秘訣を開かれるということを知らないであろう。ここに二僧がいて、一人は邪婬を行ない、一人は殺してしまった。二人は悔恨して優婆離尊者にその罪の判定を懇願をしたが、尊者は情状酌量せずに、唯だ深く懺悔して三尊道の苦患を免れるように祈るがよいといった。これを聞いた維摩居士は、罪性に実有の見を生ずるは妄想を重ねるものだ。罪性は畢竟して内にもあらず、外にもあらず、中間にもあらず、ついに不可得のものである。この不可得を証すれば人間は本来解脱していることが判るはずだといって、先きの判決を覆してしまった。そこで二僧も居士の説を聞いて疑団を破り、各々仏見知を悟ることができたという。不思議解脱の法門は一句一偈を聞くだけでも、長い間の修行に勝っているからである。

⑤仏教の法門は八万四千と称せられているが、この不思議解脱の法門である如来円頓の教えは、法門中の王であり、最も高尚で、最も勝れた教えである。三世の諸仏や歴代の祖師方はすべてこの法門を証得され、その不思議解脱の力を以って、自由自在に機に応じて衆生済度の妙用を意の如くされた。私は曹溪の六祖慧能の正伝の仏法を伝え、如来宝珠にも比すべき最上の法門を領解することができ、諸仏諸祖と同証して、不思議解脱の法門を信受奉行することを喜んでいる。諸君、仏法というものは我執や法執など、一切の執着を離れて情意の束縛を脱したときには、はじめて真の仏法が手に入るものである。

⑥月光は熱し、日光は冷やかであることは万古不變のものであるが、もしも、神変不思議の妖術を心得た惡魔がいるとして、日光を冷却し、月光を灼熱させることができたとしても、その惡魔が如来の真説を打破することとは、到底不可能なことである。この道理を知らずして正法を誹謗し、これを妨害せんとする輩は、恰もカマキリが手鎌を振り上げて車の轍を拒むようなもので、カマキリのほうが反って曳き殺されてしまう。巨体の象は大道を真直ぐに前進して、決して小兎の飛び廻る野山の小径を歩かないように、真の正法を大悟した者は知見宏大にして、名相言語の末節に拘束されないものである。諸君たちは管見から大乘円頓の如来禅を誹謗しているが、実に気の毒でならない。天下の参禅諸君、私は諸君たちの疑団を解き、不明の点を決断してやるから、今、直ちに私の門下に来れ、さあ、速やかに来って私と問答をし、そして疑問を解け。

この「永嘉証道歌」から、本庭園の細部構成、及び名称についてその関係を照合してみると、まづ「法身覺了無一物、本源自性天真仏、五陰の浮雲空去来、三毒水泡虚出沒、証実相無人法。」(法身覺了すれば無一物、本源自性天真仏、五陰の浮雲は空去来、三毒の水泡は虚出沒、実相を証すれば人法無し。)に基き、「五陰の浮雲は空去来」を五老峰に、「三毒の水泡は虚出沒」を池泉の三島に配当して水位を高くしている。「獅子吼無畏説、百獸聞之皆腦裂、香象奔波失却威、天竜寂聴生欣悦。」(獅子吼、無畏の説、百獸之を聞いて皆腦裂す。香象奔波するも威を失却す、天竜寂に聴いて欣悦を生ず。)に基き、「天竜寂に聴いて欣悦を生ず」を池泉に配当して「臥竜池」と名付けている。「入深山住蘭若、岑崟幽邃長松下、優遊静坐野僧、家園寂安居実瀟洒。」(深山に入り蘭若に住す、岑崟幽邃たり長松の下、優遊として静坐す野僧が家、園寂たる安居、実に瀟洒。)に基き、園内に多数の松を植え臥竜松と名付けて表現している。「争似無為実相門、一超直入如来地、但得本莫愁末、如淨瑠璃含宝月、我今解此如意珠、自利利他終不歇。」(争でか似かん無為実相の門、一超直入如来地なるに、但本を得て末を愁ること莫れ、淨瑠璃に宝月を含むが如し、我今、

此の如意珠を解す、自利利他終に歇きず)に基、き池泉の中央に大きく、対岸の観音殿へ①亭橋を架け「一超直入如来地なるに。」を表現している。また、「一性円通一切性、一法徧含一切法、一月普現一切水、一切水月一月攝。」(一性円に一切の性に通じ、一法徧く一切の法を含む、一月普く一切の水に現じ、一切の水月一月に攝す。)に基き、観音殿を「水月場」と名付けている。さらに「吾早年来積学問、亦曾討疏尋経論。分別名相不知休。入海算沙徒自困。卻被如来苦呵責。数他珍宝有何益。從來踏蹬覺虚行。多年枉作風塵客。」(吾、早年より来、学問を積み、亦曾て疏を訪ね、経論を尋ね、名相を分別して、休する事を知らず、海に入りて、沙を算えて徒に自から困す、却って如来に苦に呵責せらる、他の珍宝を数えて何んの益があると、從來踏蹬として虚りに行ずることを寛ゆ、多年枉て風塵の客となる。)に基いて「春帰家」②と書き、その遺幅は永保寺に保管されている。

註

① 亭橋は無際橋をはじめとして西芳寺の邀月橋、常在光院の楓橋亭、東山殿の龍背橋、東福寺の通天橋とつくられた。(室町時代庭園史 P 481)

② 夢窓国師は「西山夜話」で「古人の云く、靈光不昧万古の微猷、此の門に入り来りて知解を存すること莫れと。我れ教門を出て禪門に入る、所学異なりと雖も、知解は是れ同じ。只麼に時を過ぎば、其れ豈靈光を昧却するものに非ず哉と。便ち年来貯ふる所の骨董袋を以て、悉く丙丁童子に付す。」と示し、永嘉大師と同じ教家の出身であったことを述べている。(国訳禅学大成 第23巻 P 199)

3. 考 察

本庭園の主題を「臨濟禅の基本思想」として「長養の工夫」のためとしたが、夢窓国師は嘉元3年(1305)10月に高峰頭日から印可を受けた後、頓悟した所を大切に保護していく長養の工夫の時期であった。しかも、延慶2年(1309)12月、書簡を高峰に送って「道価が若しわが老和尚(高峰)より下位に在らば、肯て出世(官寺の住持になる)せず、ただ閑を守って、草木と俱に腐ちんことを要す①。」という覚悟を吐露している。さらに、夢中間答第34段に「意とは祖意なり、祖意とは人々具足の本分底なり。句は五家の宗風手段なり意は根本なり、句は是れ枝葉なり。然らば則ち初心の学者は先づ祖意を参得すべし、句下に死在すべからず。古人意を得て後三十年、五十年、綿密に練磨して旧業宿障をつくすを、長養の工夫となづけたり。」と述べている通り、土岐川に臨んだ景勝地に庵を建て、祖意である「臨濟禅の基本思想」を参得し、「長養の工夫」を計ったものと考えられる。

「工夫」について、夢中間答第56段でつぎの如く述べている。「工夫と申す事は唐土の世俗のことばなり、日本にいとまといへる語に同じ、一切のしわざに通ぜり。耕作は農人の工夫なり、造作は番匠の工夫なり。かやうの俗言によせて道人の仏法を行ずる工夫と名けたり。本分の工夫をなす人、万事の中か工夫の中かへだつべきなし。中略。さらば実に道心ある人は、今は坐禅の時ならずとて、いたづらに光陰をわたることあるべからず。喫飯、著衣、看経、誦呪、東司にゆき、後架にいたる、一切の所作所為の処、衆に交はりて礼をなし、人に対して物語りする時も、本分の工夫をわすれざる人あり。かやうなるをば万事の中に工夫をなす人と申すべし。中略。古人の云はく、山河大地、森羅万衆、悉く是れ自己なり。若し能く此の旨を得ぬれば工夫の外に万事なし。」と。さらに、夢中間答第48段に「坐禅修行と申すことは禪門ばかり用うる事にあらず、頭密の諸宗にもあかせり、乃至小乗外道の法にもあり。坐禅といへる語は同じけれ共、其の旨趣各ことなり。中略。浄土宗の坐禅は十六想観等なり。廬山の遠法師等は此の行を専らにす。」と。このように、「長養の工夫」は「坐禅三昧」をし、「臨濟禅の基本思想」を参得する意味から、「廬山記」に基いて廬山を縮景した庭園を築き、庵名を古谿、さらに虎谿と名づけられたものと考えられる。

「根本内証の境界」については、夢中間答 第35段に「教の中に仏智を明かするに二種あり。一には根本智、謂ゆる仏の内証なり。二には後得智、謂ゆる化他の方便なり。仏祖出世して教、禅の法門を説き玉ふは、皆是れ化他の方便なり。然らば則ち禅、教の学者の、或は経教を見或は智識の語に随って、心識の上に領解する法門は皆是れ後得智の分域なり。若し人已に仏の内証の境界に契当せば、後得智を発して利益門に趣きて、教、禅の法門を説きて衆生を済度すべし。三世の如来歴代の祖師皆此式なり。若しいまだ仏の根本智を証せざる人は、先づ此の根本内証の境界に到らんことを思ふべし。若し此の境界に到らんとせば、教、禅の分域を超越して始めて到るべし」と述べている。そして、大乘仏教の妙諦である「根本内証の境界」を諷詠した「永嘉証道歌」から「庭園の出典を求めているのは、永嘉玄覺が教宗の出身で無相大師といわれ、また、夢窓国師も教宗の出身で夢窓と号しているだけに特別の意味を持ち、さらに「夢中間答」の内容そのものに「永嘉証道歌」が至るところに引用され、「西山夜話②」では「永嘉大師の云く、或は是或は非、人識らず、逆行順行天も測り難しと。未だこの田地に到らずして、其の体裁を学ぶ者は、當自ら錯るのみにあらず、多少の人を惹き得て、以て魔業を成ぜしむ、眞まづんばあるべからず。」(国訳禅学大成第23巻 P 209)と結語しているところからも、十分に肯定し得るものと考えられる。

禅林庭園が思想的背景をもって構成されていることは、夢窓国師のつぎの偈頌を見て明らかである。即ち、「仮山水韻、絨塵不立峰巒峙。涓滴無存澗瀑流。一再風前明月夜。箇中人作箇中遊。」(国訳禅学大成第23巻 P166)と詠じ、この築山に対して遊ぶ人は、この中の事を知った人が遊ぶといっている。

国師年譜の正和二年(1313)には「同門の元翁本元等と共に遠江を経て、美濃長瀬山に隠居する。」と記されている。これは高峰顕日が夢窓国師を上野の長楽寺③④に住せしめようとしたから、美濃の長瀬山に隠居したといわれている。国師年譜には書かれていないが、夢窓国師は美濃国主土岐頼貞の開基で、無学祖元を開山、高峰顕日を第一世として開創された定林寺に第二世として入寺していることが、土岐市史⑤の「太白和尚鴉嗅集⑥」にある定林寺第四世笑溪妙虎の偈頌で明らかである。

さらに、同門の元翁本元が土岐頼貞の招請により、先代土岐光定の納骨と三十三回忌の法事⑦と、寺内に塔頭の普照庵を創建して、開山無学祖元像と霊骨を納めている。土岐光定の三十三回忌は正和元年(1312)であるから、夢窓国師年譜に事実の相違が見られることになる。夢窓国師は高峰顕日の命により、美濃の定林寺に入寺し、同道した同門人は夢窓国師を補佐して、その経営に当たったものであろう。従って、古谿庵は定林寺の末寺として建てられて、夢窓国師の「長養の工夫」を専らにする所であると考えられる。このことは、これ以後の土佐の吸江庵、相模三浦の臥龍山泊船庵、上総の退耕庵など、いずれも門を閉じて客を謝して専ら長養の工夫をしている事実を見ても明白である。

重森三玲は「土岐氏の居館時代の作庭⑧」と永保寺庭園を考察しているが、当時の土岐家の防禦状況については、「土岐市場を中心として、西北には深沢城を築き北は本城神籠城(鶴ヶ城)あり釜戸山は恵那郡を扼し、東には宇留輪(市原城)猿子、尾里、萩原の各城殆んど相連なり、南の大手には猿子城あり、西には大富、浅野、高田、多治見と要害を構えたもの。」(土岐頼兼公 P118)とあって、長瀬の地に土岐氏居館の記録は見当らない。

夢窓国師に影の如く随って諸国を遍歴した元翁本元の「仏徳禅師語録」には「虎溪山居偶作」として、「問道参禅都罷休。癡窓徹底拙於鳩。博山灰陷夢魂断。一踏々翻黃鶴樓。」。「鏡面新開池水清。前峰倒影入波心。丹青不及王維手。相对無言到夜深。」。「冥心危坐一藜榻。雲尽水清月在池。不許蒼龍能至鑒。夜深呼杖步前墀。」(P30~31)の三偈を載せ、さらに「雨中对假山懷夢窓和尚」として「絲々春雨織人愁。滴々四簷晚未休。遺吾佛法無多子。大小石頭水韻幽。」(P22~23)と賦しているところからも、本庭園が夢窓国師による作庭であることが明らかである。

注

- ① 玉村竹二著、夢窓国師、P41
- ② 西山夜話は夢窓国師が南禅寺に入寺した際、応機接物、門弟子の間に答えた法話を収録したもの。
- ③ 仏国禅師語録巻下「正和三年甲寅、師住巨福山建長禅寺。次年乙卯退帰雲巖。師住福山招夢窓住上野長楽。窓力辞到濃州長瀬卓庵古溪。」(大正新修大藏經第80巻P283)
- ④ 夢窓国師語録巻下、天龍開山夢窓正覚心宗普濟国師年譜「正和二年癸丑、既出龍山未有攸住也。且將壞所居之菴施之淨居以成僧寮。以故暫僑淨居。或者告。遠濃二州或海隅或山阿皆可幽栖也。師意未肯。時仏国在淨智欲招師令住上野長楽。有僧預告師。師將避之。潛出淨居先到遠州。元翁不二祖用等七八人偕来。私謂。苟有適意則宜以其処為緣遇之地。徐到濃州長瀬山。略。」(大正新修大藏經第80巻、P486)
- ⑤ 土岐市史「瑞雲山定林寺略歴」(P219)

⑥ 太白和尚鴉嗅集「虎笑溪住定林諸山、地号土岐。師乃仏国四世。無相三世。現住永明、祥光、瑞雲、普照皆塔名。秦氏失鹿。高才疾足先得焉。古公居岐、流風遺俗、有存者、礼楽当近三代、干戈既復太平、某法社瑚、宗門九哲、分座禅林風月。脱脱空仏国乾坤。無相之道三伝。喝雷棒雨。下略。」(土岐市史 P220)

⑦ 仏徳禅師語録「為隠州光公三十三回忌土岐存考請、瓶建定林寺普照庵開山仏光祖師像并舍利入仏国祖師霊骨及光公骨、南董入奏殿閣涼生脱白露浄今古現成棒骨云前隠州公禅定門只禀者箇力柱石国家撫育万民攘却臣冠独奮住声負冲天氣宇不戦届人兵亦憑者箇力到处施威草偃風行動干戈坐致太平丈夫之中丈夫俊英之中俊英一息不来三十三居諸荏苒才華更只箇不壞底元物灑々落落磨玉瓊偉哉有克家之子新建浮図表誠今日斯辰安置之下略」(P12~14)

⑧ 土岐頼兼公「隠州光公は頼貞の父光定である。光定は弘安四年七十五才を以て卒しておればその三十三回忌は、花園天皇の正和元年であり、頼貞四十二才である。」(P139)

⑨ 日本庭園史大系巻三、鎌倉の庭(一)、永保寺庭園(P138~139)

4. 結語

本庭園は、古谿庵開祖夢窓国師が、悟道後の「長養の工夫」のため、庭園の主題を「臨濟録」から「臨濟禅の

基本思想」，構想は「廬山記」から「坐禪三昧による已事の究明」，構成は「永嘉証道歌」に基いて「根本内証の境界」を表現した，廻遊式築山林泉の臨済宗禪林庭園であると考察する。

引用参考文献

- 1) 佐藤泰舜校訂 夢中問答 岩波書店 昭和49年
- 2) 大正新修大藏經刊行会 大正新修大藏經第47, 51, 80卷, 大正新修大藏經刊行会, 昭和36年
- 3) 堤久雄 洪隠山石庭の主題と形成の時期
- 4) 笹原佗介 土岐頼兼公 土岐頼兼公顕彰会 昭和13年
- 5) 土岐市史編纂委員会, 土岐市史, 土岐市 昭和45年
- 6) 古田紹欽訳註 臨済録 角川文庫 昭和37年
- 7) 加藤咄堂 碧巖録大講座 平凡社 昭和14年
- 8) 沢木興道 禪とは何か—証道歌新釈— 誠信書房 昭和48年
- 9) 重森三玲 日本庭園史大系巻三, 鎌倉の庭(一) 社会思想社 昭和46年
- 10) 元翁本元 仏徳禪師語録 虎溪山永保寺 昭和6年
- 11) 玉村竹二 夢窓国師 平楽寺書店, 昭和33年
- 12) 柳田聖山 臨済の家風(日本の仏教8) 筑摩書房, 昭和43年
- 13) 仏書刊行会 大日本仏教全書 仏書刊行会 大正2年
- 14) 外山英策 室町時代庭園史 思文閣 昭和48年
- 15) 川瀬一馬 夢窓国師 禪と庭園 講談社 昭和43年
- 16) 堤久雄 洪隠山石庭の主題と形成の時期, 造園雑誌 第35巻2号 昭和36年
- 17) 国訳禪学大成編輯所, 国訳禪学大成第23巻, 二松堂書店, 昭和4年

Summary

According to the annual table of Muso-kokushi, in showa 2 (AC 1313) he came to the Totomi province from the Jogo-ji temple, along with his six or seven fellow-practitioners, such as Hongen Gen-o, Kokumon Funi, So-yo and so on, and finally reached Mt. Nagase whose solitary scenery attracted him a great deal. It is said that he built a hermitage here and called it Kokei (Ancient Valley) against the intention of his master Kennichi Koho to make him the chief monk of the Choraku-ji temple in the Kozuke province.

But according to the history book of Toki city, unlike the above annual table, Musokokushi is the second chief monk of the Jorin-ji temple whose lay founder is Yorizane Toki, lord of the Toki district, and invited found is Sogen Mugaku, and the first monk founder is Kennichi Koho. Consequently, the Kokei-an is considered to have been

built as an annex hermitage of the Jorin-ji temple and the six or seven fellow-practitioners of Musho-kokushi came to help this kokushi with his managing the hermitage.

Here Muso-kokushi applied himself to the "long strict practice after enlightenment", while Hongen Gen-o and Myogen Jusan were engaged in the temple affairs of the Jorin-ji temple. Especially the former, invited by Yorizane Toki before the annual table of Muso-kokushi, accepted the bones of the predecessor Mitsusada Toki and performed a memorial service at the 33rd anniversary of his death. Furthermore, he built another annex hermitage named Fuso-an where the image of the founder Sogen Mugaku was located and his bones were dedicated. This memorial service was performed in Showa 1 (1312) and the next year but one the Kannon temple of the Kokei-an was built.

About the situation of defence of the then Toki clan, Sanrei Shigemori, a researcher of "the gardening when the Toki clan was in the mansion" and garden of the Eiho-ji temple, says: "with the Tki market as a center, they built the Fukazawa castle in the north-western part and the Tsuruga castle in the northern, Mt. Kamado commanding the Ena district. In the front place of the south there was there was the Mashiko castle; in the west there were the positions of strategic importance, Such as Otomi, Asano, Takada and Tajimi. "(Cf. *Toivorikane-ko*, p. 118)." This shows that there was no record that the Toki clan had the mansion on Mt. Nagase.

In the *Buttoku-zenii-goroku* by Hongen Gen-o there is a passage entitled "casual work on Mt. Kokei": the surface of a mirror opens newly and the water of a pond is clear..." This means that Muso-kokushi built a garden then in such a spiritual realm.

The Summary of the Garden of the Eiho-ji Temple The subject of this garden sows the long strict practice after enlightenment..... the fundamental thought of Rinzaï Zen based on the *Rinzaï-roku*... by Muso-kokushi, founder of the Kokei-an; the conception of it shows the thorough realization of true Self through zazen stemming from the *Rozan-ki* (A Guide of Lu-Shan); the structure expresses the realm of the original enlightenment based on the *Shodo-ka* (The Song of Enlightenment) by Yoka-daishi. This is the garden of the Rinzaï Zen monastery where we walk about trees and springs.